

浄土信仰の具現をはかる 鎌倉武士宇都宮朝綱

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



朝綱入道安心之
畫像 地蔵院本堂

朝綱入道
光行

「出家後の朝綱」(「下野国誌」より)



地蔵院本堂

益子町上大羽、なだらかな八溝の丘陵が波打つのかな田園地帯。その北側の山裾に端正な形をした堂がある。地蔵院本堂である。国指定文化財になっているほどの立派な建物であり、宇都宮三代の朝綱が創建した尾羽寺の阿弥陀堂といわれている。宇都宮からほど遠い上大羽の地に、朝綱はなぜこれほどのお堂を建てたのであろうか。

宇都宮氏は系譜によれば藤原宗円が初代で二代が宗綱となっている。宗円、宗綱は益子あるいは常陸南部八田との繋がりが強いといわれるが、彼らには謎の部分が多い。史料の中に宇都宮の名をなしその実像が明白になるのは三代の朝綱からである。「平家物語」によれば、源頼朝が平家追討のために伊豆で旗揚げした時、朝綱は平家政権下京都で大番役という重責を担っていた。朝綱は、頼朝の挙兵を知っていち早くはせ参じたかったに違いない。一方、平

家側では、朝綱を油断のならない者とし京に抑留したのである。やがて朝綱は、平家の武將貞能のとりなしによつて釈放され、監視の目をかすめて京を脱出し宇都宮に戻った。

こうして京都を脱し頼朝配下に加わった朝綱は、頼朝より伊賀国壬生野郷の地頭職を拝領するとともに宇都宮社務職に任ぜられた。その後、頼朝と義経との対立が契機となつて起つた奥州藤原氏との合戦の折、朝綱も一族郎党を率い活躍。また、頼朝が後白河法皇との対決を目的に京へ上つた際には、京をよく知つた者として事前準備に遣わされ、さらには、頼朝が那須野ヶ原で巻狩りをした際には、勢子千人を献じる榮譽を賜つた。

こうした朝綱の活躍ぶりも、晩年は寂しいものとなった。嗣子業綱が二十七歳の若さで死んだ。この時、朝綱七十一歳。四十四歳で得た後継ぎならば、期待も多く、それだけ悲

しみも大きかつたであろう。その上、さらに朝綱に大きな禍が降りかかった。建久五年(二九四)下野の国司より公田百余町を掠領したと訴えられたのである。頼朝とて公田に關しては口出しできず、朝廷の裁量の結果、有罪となり朝綱は土佐国へ、その上孫一人まで流罪となつたのである。

程なくして朝綱は許されたが我が子業綱の死といい、公田掠領事件は、老齡の朝綱にとつて大きな心の痛手となつた。平家の武將ではないが、朝綱とてもこの世の無常を痛く感じたようだ。まもなく朝綱は出家して重阿弥陀仏となり、上大羽に尾羽寺を営み、家督は孫の頼綱に譲り隠棲したのである。朝綱は浄土教に帰依し阿弥陀如来の慈悲にすがつた。泉水をめぐらした阿弥陀堂を建て尾羽寺の本堂とした。傍らには、配流先の土佐で赦免の沙汰を祈つた加茂明神を勧請(後の綱神社)し、さらには父祖を祀る墓地(後の宇都宮氏歴代墓所)を設けたのである。

ところで朝綱がこうした堂舎等を設置した背景には、奥州征伐の際に見た平泉の中尊寺、毛越寺、無量光院など浄土信仰を見事なまでに具現した姿があつたに違いない。また、上大羽という地をあえて選んだのは、上大羽は宇都宮氏の故地である常陸南部の八田につながる要衝の地であり、隠棲したとはいえそこをしっかりと押さえようとしたのではなからうか。一所懸命に生きた鎌倉武士朝綱ならではの配慮とみたい。